

新CL寓話—X

2019

David K. Reynolds, Ph.D.

第1部

The Precious Jewels



10. 貴重な宝石

昔々そこには長年にわたって3人の姉妹が住んでいました。3姉妹は結婚して夫と一緒に住み、親元からは離れました。それぞれが赤ん坊を持つとうとしていました。

一番歳上の姉は「赤ちゃんを持つのはなんて幸せでしょう。両親は孫を自慢に思うでしょう。夫も子供を誇りに思うでしょう。家族としての義務を果たせてうれしいわ」と言いました。

真ん中の娘は「夫をお世話するのは私の喜びです。まもなく生まれてくる子供はお互いの愛のシンボルです。子供はお互いの愛ではぐくまれ、もっと一緒に親密になるよう引き寄せてくれるでしょう」と言いました。

末娘は「もうすぐ子供は生まれてきます。夫は私の元を去ったけれど、もう1人ではありません。再婚するかどうかわからないけど、いつも愛すべき誰かがいます」と言いました。

おわかりですか、これから母になる娘たちは、ひたすら子供の誕生を待ちました。そして同じ日に陣痛がおきたのです。娘たちは母親の家で3つのベッドに並んでお産を待ちました。すべてが順調に進み、お産はとても軽かったのですが、その場にいた皆がショックを受けたのは、身をよじって産み出たのは、どの母親も大きな光輝く宝石だったのです。

皆がなすすべもなく、茫然とたちすくんでいると、宝石の切子面は反射した光できらめきました。姉妹たちは突然悲痛な声で泣きだしました。

どうすべきか誰にもわかりません。このような驚くべきことは今まで一度もこの王国で起こったことはありませんでした。突然3つのこのようなできごとが同時に起きることなど想像を絶しました。一番上の姉は宝石を拾い上げて、部屋の向こう側に投げつけました。

「これが私の家族に良いことなの」「どんなに美しく高価でも、こんなもので血筋はつながりません」と叫びました。

真ん中の娘は毛布を頭まで引っ張り上げて、夫を見るのも否がり、恥ずかしさで被いました。末娘は泣きじやくってベッドを握りこぶしで叩きました。

「みんな！ここから出ていって！」「私たちだけにして」と叫びました。

静かに皆がこぞって外に出ました。最後の1人は、胸がはり裂けるほどの姉妹の悲痛な弱い泣き声が耳に入りました。

それから3日の間姉妹らは、ほとんど食事もせず、生まれてこなかった子供たちのために深く悲しみ、部屋に閉じこもったままでした。一番上の姉は妹たちを慰めようとしたのですが、してあげることも、言うこともみつきりませんでした。

3日目にドアがおどおどとノックされました。日光でしわが寄った顔の年取った小さな婦人が入ってきました。3人の姉妹はすぐに自分たちにひどい呪文をかけた魔女だと思いました。けれども彼女の声は優しく、言葉は聡明さにあふれていました。

「私はあなた方を助けたいのです」と老女は言いました。

「どうか私の話を聞いてください。そしたらきっとなぜ私が来たかおわかりになるでしょう。私があなた方のように若かったとき、結婚して可愛い小さな娘がいました」。

真ん中の娘はすすり泣き始めました。

「私たち夫婦はとても娘が自慢でした。一人っ子のようにとてもだいじにされ、甘やかされ、大切に守られていました。娘の誕生から数年後に私の両親は、国を襲った伝染病で死にました。夫は戦争に駆り出され、遠く離れた外国で殺されました。しかし、娘はまだ私の手元にいて一緒だと思いました。独りぼっちではありません」。

「ところが夫の死から数カ月の間に娘は病気になりました。できるだけのことをすべてしたにもかかわらず娘は小さな体を燃えるような高熱で、体が弱まり死んでしまいました」。

「今の私には誰もいません。家族も夫も子供も。この世にたった一人、とても空しく思いました。自分に理解力と強さを求め祈り続けました。幾晩も祈って泣きながら眠りにおちました。夢の中でも祈っていました。ある晩、夢の中で何か声を聞いたのです。声はどこからともなく、どこからも聞こえてきました。その声は『あなたが所有しているものは何か？』と聞くのです。

私は『この家、私のベッド、部屋着、くし…』と答え始めました。

『いいえ』と声がいいいます。私はもう一度答えました。『サンダル、ネックレス、私の娘…』と言って娘は(すでに)死んだのを思い出しました。

『いいえ』と再び声が静かに言いました。そこで私は理解したのです。私は何も所有などしていないのです。すべては貸してもらったものです。話す言葉は親から教えてもらった借り物です。サンダルは牛飼いと靴職人と商人からの借り物です。娘も同じく借り物でした。両親、夫も」。

「でも、あなたには数年間でも借りた子供がいました」と真ん中の娘が出し抜けに言いました。「私たちには生命のない宝石だけです」。

「そう、これはあなたたちへの私からのアドバイスです…」老女は話を終えた後、姉妹たちがベッドに座って考えこんでいる間に、静かにいなくなりました。

その村には古くから残っている小さい寺院があります。簡素でペンキが塗ってありません。正面玄関のひさしの上に3つの巨大な宝石が飾られていることでその地域では知られています。宝石は昔住んでいた3人の姉妹によって寄付されました。

伝説では1つの宝石が家族の名のもとに寄付されたと伝えてあります。宝石はぼろぼろに砕けた家族の墓石よりはるかに長く残りました。2番目の宝石はある夫婦から寄付されました。二人の決心でこの貴重な宝石を手放し、二人の愛を地元で一番強くしました。3番目の宝石は若い女性から寺院に送られました。彼女はほほ笑んでいる司祭に一言「私にはもう要りません」と言って差し上げました。

人々はいろいろな理由で子供を持ちます。家系を続ける証に、夫への愛の表現として子供たちを持ちます。人生を通して誰かを愛し世話をする証として、子供たちを持つ人もいます。子供を自分の所有物と考えている母親も中にはいます。しかし、子供たちも、人生や考え、服と本のように借り物です。人は現実が自分たちから子供を奪い去る時まで、借り物であることを理解しません。

3人の姉妹は出てきた宝石が、赤ん坊のように、世界からの贈り物だったとを悟りました。その贈り物を世界に返す決心をするまで、姉妹たちは不幸でした。ある人をしっかりつかもうとすると、(2021夏101号一少年が物語 No. 8で猫を失ったのと同じように)、失くす怖れがあります。姉妹たちはだいじな宝石を寺院に敬意を表して寄付しました。一番上の姉は家族の名前で寺院に寄付しました。2番目の姉妹は愛する夫の名前で寄付しました。末の姉妹は宝石はまったく自分の物ではなかったと知って宝石を寄付しました。子供を持つことで幸せを望むのは非現実的だったと悟ったのです。(アメリカ・オレゴン州CLセンター所長)